

田中 悟著

## 『会津という神話』

——〈二つの戦後〉をめぐる〈死者の政治学〉——

白川 哲 夫

本書は、博士論文をもとにしてまとめられた著者の初めての著書である。タイトルに示されているように、本書は戊辰戦争の激戦地として知られる福島県会津地方を素材とし、戊辰戦争ならびにその際の「死者」たちをめぐって、地域社会がどのようにアイデンティティ形成を行ったのかを地域の近・現代史として叙述したものである。その目的は「死者」を通じた近代ナショナリズムの分析であり、その意味で本書は会津という地域の「地域史」ではあるが、単純に地域社会の歴史を扱った本ではない。

副題に使われている「死者の政治学」という表現から、評者はまず、「死者」をめぐって、日本社会において現在も政治的・思想的な論争が展開されていることを連想した。それは具体的には靖国神社に代表されるような、近代日本の戦死者をどう意味づけるのかをめぐってである。あるいは評者の浅い知識を動員すれば、「政治学」ということではないのかもしれないが、『祖国のために死ぬこと』を著したカントロヴィッチや、『死を前にした人間』

を著したアリエスなどの議論が思い浮かんだのである。いずれにしても「死者」は、現に生きている人間にとつて極めて厄介なものとして立ち現れ、真剣に向き合うことを求められるのである。こうした厄介なものに正面から挑んだ著者の姿勢に、自らも「死者」をめぐる社会の動きに関心を持つ者として、まずは敬意を表したい。

本書の構成を一通り紹介しておこう。

序章 死者と共同体

第1章 会津藩の戊辰戦争——近代会津へのプロローグ——

第2章 「阿蘇」の佐川官兵衛をめぐる記憶と忘却

第3章 近代会津アイデンティティの系譜

第4章 「雪冤勤皇」期会津における戦死者の記憶と忘却

第5章 戦後会津における「觀光史学」の軌跡

終章 〈二つの戦後〉をめぐる〈死者の政治学〉

序章では、田辺元が戦時中に「国家のために死ぬこと」の意味を論じた講義やヤスパースの議論を引きながら、やがてケドウリーのナショナリズム論や「境界線の政治」(杉田敦)へと議論を展開していく。著者がここで明確に示しているのは、近代的な死の議論のもつ限界を指摘するとともに、その死を意味づけるものとして採用された近代ナショナリズムこそが分析対象であるということである。そしてそのナショナリズムからも「疎外」される死者があり、それが本書で事例として挙げられる戊辰戦争での会津の死者たちだったというのである。つづく第1章では会津藩が直面した幕末・維新の政局や戊辰戦争とその敗北について簡潔にふれられる。

第2章では、著名な会津藩士として佐川官兵衛がとりあげられる。佐川は戊辰戦争で勇猛な戦いぶりを見せた人物であったが、西南戦争では官軍側として参戦し、熊本県阿蘇地方で戦死している。彼にの戦死後の阿蘇での扱われ方がこの章の主題である。著者によれば、重要だったのは当時の阿蘇をめぐる情勢であった。西南戦争における薩摩軍は、この地域で農民一揆がおこっていたこともあって「世直し」の文脈でとらえられたという。したがって官軍側として参戦した佐川については、現地で一部に墓碑を建立する動きがあったものの、地域からは共感を得られなかった。それが一九六〇年代以降、会津の人々によって佐川の戦死の地が「発見」され、その顕彰活動が地元でも受け入れられていく。著者はこうした一連の動きを追いながら、そこに「記憶と忘却」をみるのである。

第3章では、近代の会津を「アイデンティティの危機」に瀕した地域として、その危機を克服するための戦略を、時期ごとに追っていく。戊辰戦争での敗北により、「賊軍」とされた会津藩士の属した会津地域では、明治二〇年代以降に「雪冤勤王型」の維新史が生まれる。「佐幕」ではあっても会津藩は天皇への忠誠、すなわち「勤王」の立場であり続けたのだ、という歴史の描き方である。昭和期には松平家と秩父宮との縁談という形で「雪冤」が成り、会津の「勤皇精神」が日本精神を代表するものとして評価される。そして戦後には、観光都市化を目指した会津若松市の戦略に沿った形で、新たな〈歴史〉が語られた。〈歴史〉の語り手としては司馬遼太郎と宮崎十三八が挙げられ、彼らの〈語り〉とともに「観光史学」が成立したとする。

第4章では、戦死者の記憶と忘却という問題について、白虎隊と佐川官兵衛を取り上げている。白虎隊については、「少年」であったということの弱さと純粹さが、やがて「日本精神」の象徴的な神話となっていく歴史過程について論じている。佐川については、西南戦争参戦によって賊軍から抜け出した存在であるとし、靖国神社に合祀されることによって、彼らは「祭り上げ」されて地元では忘却されていたのではないかと推論を立てている。こうした忘却は、時間の経過と世代交代によっておこる。これを著者は「戦死者の近代化」ないしは死者の「三人称化」と呼んでいる。

第5章では、第二次大戦後の会津の観光都市化について論じる中で、「歴史」の語り部を必要としたと指摘。その役割を果たした人物として市役所職員から郷土史家となった宮崎十三八が改めて挙げられ、その語りの変遷について検討されている。またこの章では、会津という地域の独自性として、戦争犠牲者と戦後補償をめぐる国家との対抗関係が成立せず、むしろ戊辰戦争の被害者について語ることから、近代藩閥政府との対抗関係が想定されたとも述べている。そして現在の会津においては、第二次大戦の戦死者も、戊辰戦争での戦死者もともに遠い昔の、「戦死者ならざる死者」となり、どちらも忘却されてしまっている。この事態は、著者によれば会津にとどまらない、現代日本の到達した境地だという。

終章では、それまで検討してきた近代会津を四つの局面に整理してモデル化している。すなわち、第一が「戦死者の雪冤」。それは戊辰戦争戦死者の再評価過程であり、会津という共同体、死

者と生者の関係という枠に沿ってアイデンティティを獲得する試みである。第二は「戦死者の代替わり」。近代戦争の中で戦死者が発生し、彼らが靖国神社に祀られることによって、生者のアイデンティティはネイションと結びついた。そして戊辰戦争の戦死者はネイションの文脈で再評価される。死者と生者の関係が更新され続ける時期である。第三は「戦死者の忘却と召還」。会津では近代戦の戦死者は敗戦によって忘却され、かわって戊辰戦争の戦死者が「召還」されて「怨念」が噴出した。第四は「戦死者の退場」。代替わりによって、近代戦争の死者も、戊辰戦争の死者もアイデンティティ獲得の場から退場し、死者の想起において戦争という要素が失われていく段階である。こうしたモデルの諸局面を設定するのはカール・シュミットの「境界線の政治」であり、また局面を動かす力となるのは「たゆまざる時間の流れ」である。

そして著者は最後のまとめとして、近代日本とナショナリズムの関係に言及する。すなわち近代会津のアナロジとして靖国神社問題を考察し、そのフェードアウトを予想している。靖国神社に代表されるような、ナショナリズムにもついた近代日本における死者（戦死者）の意味づけは揺らいでいくだろう。しかし死者との関係を単に忘却することは許されず、たえずその非倫理性が告発され続けるとして、「どこまでの死者に向き合う」のが常に問題になる、としている。そのことを通じて、常に非倫理的である「境界線」に自閉しない倫理性を志向することを提起している。以上が評者の理解にもついた本書の大まかな内容である。

さて、本書で素材とされている会津地方といえは、幕末・維新

期にかけて佐幕派の中心的存在として重要な役割を果たした会津藩の本拠地である。戊辰戦争での悲劇的な敗戦は白虎隊をその象徴的存在として、たびたび小説や映像作品で取り上げられてきた。本書でもふれられているように、早乙女貢・網淵謙銃・中村彰彦そして司馬遼太郎といった名前がすぐに挙がる。また一九八六年に放映されたテレビドラマ「白虎隊」は、NHK紅白歌合戦の裏番組ながら高い視聴率を記録するなど、「会津という神話」は全国に浸透しているといえる。そうした「浸透力」が論証されているのが第2章である。会津地域の具体的な分析に入る前に、阿蘇地方を素材とした章を設けていることで、より会津神話の「強さ」が明確になる効果的な構成である。

第3章では神話を「発信」する会津側の戦略についてふれているが、これまでエピソード的に紹介されることはあつたが、そういったものを通時的に整理した内容として意義がある。第5章の内容とともに、戦後の会津について「観光史学」という概念を設定し、その限界を指摘するくだり（二二八ページ）は、会津若松という土地への一般的なイメージがいかに作られてきたかを詳細に明らかにしたあとでの結論なので、説得的なものとして評価できる。「観光史学」概念の設定は、本書の全体的な問題意識とはややずれるが、戦後日本各地で書かれ、あるいは語られた「地域史」の形成を考える上で示唆的な方法ではないだろうか。「地域史」の問題性というものが、この二つの章ではよく表れているように思うし、また歴史学自体も一定程度そこにコミットしてきた面がある。そして本書で強調される会津の特殊性とは、その「地域史」が非常に力を持ち、全国的にもよく知られるようになる、

そのプロセスである。

戦死者の慰霊・追悼の問題については、従来の諸研究とは一味違う視点で論じられたことが本書の注目すべき部分である。第4章では、靖国神社に祀られた会津ゆかりの戦死者は地元ではかえって「忘却」され、祀られない白虎隊は記憶され続けるという、靖国のひとつの逆説を描き出している。また終章で示された近代会津の四つのモデルは、非常に興味深く読むことができた。戦死者の扱いをめぐる「境界線の政治」と「たゆまざる時間の流れ」について、なんとなく評者も感じていたその変遷のありようを、明快な形で説明したものである。そしてそれが、靖国神社やナシヨナリズムの今後をも示唆している、という展開は、従来のこの種の議論にはみられなかった形の靖国・ナシヨナリズム批判であるといえよう。評者なりにうけとめれば、それは靖国、あるいは近代ナシヨナリズムなるものが持っている力の「強さ」自体への懐疑である。

以上の点で本書の意義を認めつつ、問題点や今後の課題とすべき部分も見受けられた。そのことについて具体的に検討する前にまず述べておきたいが、評者は主として歴史学の観点から「死」の問題にアプローチしてきた人間である。「死」の問題を扱うとすれば、当然ながら関連する宗教学や哲学、思想に関する議論もおさえておかねばならないが、必ずしもそのあたりが十分でないところは日々自覚しているところである。そうした自らの現状を踏まえつつも、まず本書を読み始めての第一印象としては、序章と第1章以下の方法論の違いにとまどったというのが正直なところである。具体的にいえば、序章で展開されている様々な理論的

枠組みと、第1章以下の会津に関する実証過程との間に、率直に言ってギャップを感じた。こうしたギャップは、終章にたどりついたところである程度埋められたが、そこまではなかなか結びついてこなかったのである。これは、私が歴史畑の人間であることから起こったことかもしれない。

まず個別的問題点や課題となる部分を挙げてみる。一つは、第2章八六ページの史料にみえる「明治百年記念」の問題である。この章は阿蘇と会津の関係だけでなくまとめられている内容だが、当時日本社会で広く語られていた「歴史」とはどう関連していたのか。日本社会における幕末・明治という時代の「語り」がこの時期、大きく変動していたことは考慮に入れておくべきである（本書で挙げられる司馬遼太郎も大きな役割を果たしている）。もうひとつは阿蘇における佐川官兵衛顕彰の受け入れを「一揆罪悪観」の希薄化と戦後の農地改革などによる社会の変化から説明しているが、第3章以降の叙述との関連でいえば「観光史学」の問題を考える必要はないだろうか。会津という外部からのインパクトがあったにしろ、阿蘇にとっても佐川を顕彰することの積極的意味があったと思われるのだが、その事情についてはふれられていない。

それから、第4章での警視隊と禁門の変戦死者の問題である。会津出身者ながら靖国神社合祀という共通項を著者は重視しているようだが、官軍側として戦った前者とあくまで会津側として戦った後者とで、少なくとも国家にとっては基本的な差異がある。前者を靖国に祀ることについては、国家には何の葛藤も生じず、戦死の直後に合祀されている。後者は合祀が一九一五年までかか

っていることからわかるように、祀ることに付いてかなりの時間を要したのである。戊辰殉難者五十年祭の時点では両方合祀されていたからともに「忘却」されたとしているのだが、合祀の時期は大幅に違っている。彼らは同じレベルで「忘却」されたのだろうか。禁門の変戦死者の合祀を求める運動があったことについては本書でも言及されている。会津でのそれについて、もう少し具体的な事実を挙げておいたほうがよかつたのではないかと。

つぎに、本書全体を通しての論点をいくつか指摘しておきたい。第一に、著者が強調する会津の「特殊性」についてである。まず近代戦争の死者の扱いについて、一六四ページでは「認識と評価の対立軸が形成された戦後日本社会全般の状況と比較して」特殊であるとし、その要因として地域に具体的な戦争被害がなかつたことを挙げている。しかしそういう地域は会津だけではなく全国には相当数あつた。それを会津の「特殊性」の要因ということとは難しいのではないかと。また、つづけて「近代戦争に対する認識や日本軍の行為に対する評価」も会津では大きな争点にならなかつた、としているが、地域史のなかで近代戦争の位置づけが語られるようになったのは、ようやく近年になってからであり、「軍隊と地域」研究の進展、広島・長崎や沖縄などはむしろ例外的である。一方で、遺族や旧軍関係者は、戦後社会においては少なくともある時期まで有力な社会集団であり、彼らは戦後社会が戦死者に対して冷淡であると感じ、その風潮に反発していた。それは地域単位では一定の影響力を持つたのではないだろうか。「観光史学」という枠の中に入つてこないことをもって、戦死者たちを地域の人々が「忘却」したと説明するのは早計ではないかと。

第二に、「会津もの」のインパクトについてである。第2章で述べられているように、外部の主体によつて地域の歴史が「想起」される場合がある。第2章は会津が阿蘇に与えた影響だったのが、会津が外から影響を受ける面というのは考えなくていいのだろうか。近年のNHK大河ドラマが果たしている役割を思い起こせばいいのだが、地域の側がそうした媒体によつて形成されるイメージにある意味で利用して、観光振興などにつなげるケースは珍しくない。それは本書の表現にしたがえば「消費」されるものでしかないが、けつて消えてなくなつてしまふものでもない。たとえば萩市との姉妹都市提携問題は、「会津もの」で広まった会津イメージのほうに、むしろ地元が引きずられた結果として読むことができるのである。いうまでもなくナショナルリズムやネイションは、外部を意識したうえで自己認識として形成されるものであるから、地元「観光史学」という戦略だけでは説明できない部分があろう。

第三に、第一の問題とも関連するが、本書の分析を通じて示された「四つの局面」についてである。このモデル化は非常に興味深い提起だが、このモデルをひとまず首肯するとして、「第二の敗戦」による戦死者をどう位置づけるのか、という第三の局面の状況説明に疑問がある。つまり会津においては、近代戦争の戦死者が忘却されて、もっぱら戊辰戦争にアイデンティティを求めたということのだが、さきにも述べたように、少なくとも会津に生きていた個人のレベルでは、遺族や旧軍人でなかつたとしても、アジア・太平洋戦争のインパクトは人生を左右する衝撃的なものだっただろう。宮崎などが「観光史学」でとつた戦略には入つて

こななくても、それとは別のレベルで地域にもうひとつの「第三の局面」があつたのではないか、と思うのである。本書の表現にしたがえば近代戦争の戦死者を強く「想起」していた一段階である。なぜそれを考えるかといえは、戦後日本における丸山真男のいう「悔恨共同体」の問題との関連である。「悔恨共同体」自体は戦後の知識人について論じる中で出てきた表現だが、ありていにいえばこうした「敗戦」による「共同体」は会津にはなかつたのか、という疑問である。その意味では、第5章において画期として提示されている一九五七年（会津まつりにおける戊辰戦争の強調のはじまり）という年代が示しているとおり、敗戦からそこまでの期間、一九五〇年代をどう考えるかという問題がある。

最後に、本書全体を通読して考えたことは、「記憶」「忘却」あるいは「想起」というキーワードについてである。この種の議論をするときには再三にわたって使用されるが、自戒をこめていうならば、ある歴史事象にその言葉を当てはめることが、はたして

その内容を適切に説明したことになるだろうか、という懸念を持ちつづけることが大切である。誰の、あるいはどの集団のレベルで、「記憶」「忘却」「想起」が起こるのか。そのことに対する慎重な検討が、本書のタイトルでもある「神話」の有効性を計る手がかりとなるだろう。

以上、極めて簡単ながら評者なりに本書の内容を受け止めたうえで、その書評を記した。誤読や理解不足な点があつたとするならば、それは評者の力量ゆえである。本書が近代日本の「戦死者」をめぐる問題について新たな議論の方法を示していることは確かであり、また会津という地域を取りあげている点でも意義が深い研究であることを最後に記して擲筆したい。

(A5判 二七四頁 二〇一〇年三月)

ミネルヴァ書房 税別六五〇〇円)